
吸血姫がやって来る

MiTi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血姫がやって来る

【Zコード】

Z5878X

【作者名】

MiT-i

【あらすじ】

機械・ネットワーク・AI技術が進歩し、

それらの技術を結集して、とあるVRMMORPGが開発された。

そのゲームのプレイヤーの一人であるPC名“ソラ”。

彼が、とある個人イベントクエストを終えた事から、この物語は始まる…

ファンステイア（前書き）

初めまして、創作小説初挑戦初投稿のMiTiです。
ネット小説、二次小説乱読が趣味の自分が、
”探せば見つかる、けどなかなかない” ジャンルの小説を、
「無いのなら、自分で作ってしまえ！」 というコンセプトの元、
執筆するに至った作品です。

完全趣味な為、未熟、文才がない、更新不定ではありますが、
読んで頂き、楽しんで頂けたら幸いです。

では、どうぞ…

ファンステイア

”ファンステイア”

この世界には大別すると3の種族が存在する。

1つ。人間。

平民に貴族、頂点に王が君臨する身分階級。

一部には魔法という特殊な力行使することが出来る魔法使いがいるが、

魔法が使えたるそいつは貴族、ということはない。

全国民の大多数によつてえらばれた王が、

そのものの働きを認めて初めて貴族となれるのだ。

様々な職、身分階級があり、それらが集まりいくつかの派閥があるが、

人間族全体で見ると、大きく一つの派閥に分けられる。

その派閥とは…

1つ。動物。

犬や猫等のペット、豚や牛などの家畜といった普通の動物のほかに、ペガサスやドラゴンなどとった幻獣も存在する。

人間から見て、動物を派閥で分けるとするならば、野生動物か飼われている動物か、になるが、

これら二つの派閥の間には特別な争いは無く、動物の世界にある唯一の法則は、弱肉強食。

強者が頂点に君臨する法則だが、これはどの世界でも共通するので、この法則が世界全体に影響することは無い。

あるとするならば、飼われている動物についてだが…

最後に、亜人。人ならざる人。

エルフやドワーフ、ワーウルフやマーメイド。その他多種多様な種族が存在する。

種族間の諍いなど多少あるが、亜人の世界は基本各々が種族繁栄を目指しているため、特に世界に影響することは無い。が、ここに人間が関わると別である…

多種多様な亜人は、それぞれの種族に何かしら特化したものがあり、その技能や力は人間を凌駕する。

強い力は恐れを生む。それは、感情が最も豊かであり複雑な人間ならば更に生みやすい。

いつしか、その力が自分達に向けられることを恐れ、向けられる前に廃絶してしまおうと考えるもののが現れた。

同時に、人間こそが最高の種族であると考え、亜人の持つ力を自分達の為に使わせようと、従わせよと考えるものも現れる。
彼等に共通することは、亜人の支配だ。

だが、人間の中には、一方的に支配することを良しとせず、共に協力し合い、共に生きればお互いに更なる発展繁栄が望めるであろうと、亜人との共存を考えるものが現れる。

支配と共存。これが人間の世界を一つに分ける派閥だ。

このファンタスティアでは、長きに渡り支配派の人間対亜人と共存派の人間で戦争が続いている。

情勢は一進一退。生き延びる為に、共存派の人間と亜人が、互いに知恵と技術を出し合い力を付ければ、

支配派は己等の知恵を寄せ集め、引き出し、時には敵を真似ること

で、自分達も力を付ける。

支配派が亜人を滅せようとなれば、亜人は滅ぼされない為に、共存派は亜人を守るために、

同属ではある支配派の人間の前に立ち塞がり、亜人を守る。
種族の特性などから時折人を襲うときはあるが、亜人側からは人間を支配、

または殲滅しようとする意思は無い為、支配派の人間が諦めれば終わるのだが、
人間の欲望や感情は止まる事がない。

故に、支配という考えが消えず、戦いが終わることが無かつた……

ファンステイア（後書き）

いかがでしたでしょうか？

とりあえずプロローグその1です。

キーワードを見て疑問に思つ方がいると思われますが（いて欲しいです）、

後何話かのプロローグと本編1～3話読んで頂けたら、

この疑問も解決、納得して頂けると…思います。

それではこの辺で。
意見・感想お待ちしております。

吸血姫（前書き）

連続投稿です！…と言つても、書けていたのがここまでなだけですが…
とにかくどうぞ…

吸血姫

ファンステイアのある国にある城。ここでも戦争の一端が開かれていた。

城の主は真祖の吸血鬼。過去に支配派が強力な人間兵器を創り出そうとして生まれた存在。

月の魔力により強力な力や魔法を行使することが出来るが、何処で失敗したのか、

時折抗い難い吸血衝動が沸き起こり、吸血の際に際立つ牙によつて噛まれれば、

処女童貞であれば吸血種に、そうでない者はグールとなる、

これら吸血種に共通することは、月の魔力と吸つた血に巡る力や魔力を取り込むことで力を増すことと、

吸血種になつたことで強化された身体感覚器官。

強化された故に影響も大きくなつた強い匂いを発するものや日光という弱点。

吸血種は、早さは異なるが、心臓と脳さえ無事ならばいがなる傷からも再生するが、

真祖以外は、日光を浴びるとその箇所が燃えて塵と成り、以後再生することができない。

そして、吸血種になつた大元の真祖を滅すると、直接間接に関わらず、

その真祖によつて吸血種となつたものは全て消滅する。

初め真祖の吸血鬼は男女10人、計20人存在した。

しかし、吸血種の強い力、吸血衝動と吸血種化を恐れ、自分達で創

つておきながら、

吸血種達を亜人とみなし、討伐対象として、長い年月、幾多の戦の果てに、

生き残つた真祖の吸血鬼は極少数となつた。

生き残りの、城の主である吸血鬼の女性は、他の真祖とは違う所があつた。

他の吸血鬼が生き延びる為に人を噛み吸血し、自らの力を増し配下を増やす中、

彼女は、自分達真祖が負われる理由がその点にあるために決して人を噛むことがなかつた。

吸血衝動はわざわざ人を噛んで行わずとも、普通に血を飲めば治まるのことだつたので、

それを聞いてからは、共存派が血を提供することとなつた。

対価を求めてのことではなかつたが、これに対しても吸血鬼は、

その力を持つて自分を護り生かしてくれる人々を守ることを誓つた。

共存派の人間と城に住む吸血鬼が、互いに護りあい共に生きる日々が続き、

何時しかその吸血鬼は、その美貌から、多くの者の血から得られた強さから、

何があるうとも、共に生きる者を護り人を噛まないという誓いを貫き通したその姿勢から、

いつしか彼女は”吸血姫”と呼ばれるようになつた。

その日まで、吸血姫の所に彼女の同属、真祖の男がやつてくるまで、稀に支配派の人間が襲つてくるも、それを撃退し、

吸血姫と、彼女と共に暮らす人々は平穏な日々を送っていた。

彼は、吸血姫とは正反対とも言えた。

殺されぬために一つの場所に留まらず、生き延びる為と力を増すために、

行く先、逃げる先々で、吸血衝動を抑えることなく、老若男女問わず人に嗜み血を吸つて行つた。

誰かの親が、子供が、友人が、恋人が吸血種にされた。

吸血されても服従させるなどの強制力は無い為に、それらの者が必ずしも自分達を襲うことは無く、むしろその人の意思によつては吸血種になつただけなのだが、一度吸血種になつてしまつては亜人、討伐対象とみなされる。こうして多くの者達が命を落としていった。

復讐心は増して行き、人々はあらゆる手段を用いて吸血鬼を討伐しようとする。

逃げ切ることに限界を感じてきた吸血鬼は逃亡中に吸血姫の噂を耳にする。

「吸血鬼の真祖が、共存派の保護下で暮らしている」

それを聞いた吸血鬼は、同属である自分も保護されるだろう。

そう考えて吸血姫の住む城へと向かつた。それまでと同じことをしながら…

吸血姫の城がある町へ来た吸血鬼は、何故彼女が保護されているかを調べもせず、

今までと変わらずに吸血衝動を抑えようともせざるを、共存派の人間を嗜み血を吸つた。

突然現れ始めた吸血種。原因を調べれば直ぐに見つかり、その吸血鬼は危険とみなされ、町の人々は彼を追いたて、最後は吸血姫の手によつて葬られた。が、既に遅かった……

隣人が亡くなつてしまえば、直接の原因であつた吸血鬼が消えようと、

その同属である吸血姫も恨まれ、復讐の対象とされる。

共存派に属していた者達の中に、吸血姫を滅せようとする者が現れ始め、

同じ共存派であつたが故に強く止められずにいた。

そしてとうとう我慢の限界が訪れ、復讐者たちが動き出し、同時に、吸血鬼を追つてきた支配派の軍隊までもがやつてきた。

こうして、戦端が開かれた……

吸血姫（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその2です。

プロローグは後1～3話ほど続きます。

引き続お読みになつて頂けたら嬉しいです

「アーヴィング」

3番目でやつと並んでるキャラクター。
でも、まだ本編じゃない…
だが、後もう少しだ。もう少しで…
とにかく、いいやー。

剣が、盾が、斧が振るわれ、矢が、槍が、魔法が飛び交う。武器を持った人が、人を乗せた動物が入り乱れてはぶつかり合い、一人また一人と倒れていく。

激戦の中を一人の青年が駆けていく。周囲の誰もが鎧などの防具と武器を纏う中、その青年が纏うのは脚甲と鉄拳付きのファインガーグローブと黒で統一した衣服のみ。

かなりの軽装であるが、動きはそれに見合った軽快さだ。

一箇所に留まることなく常に動き回り、鍔迫り合いに一切発展させることなく、全ての敵に対して一撃離脱で命か意識を奪うか、遠くへ吹き飛ばすか、何らかの損傷を与える。

単独とは言え、早く、速く、広く打撃を与えてくる青年を無視できず、彼を注視することで生まれた隙を突いて、青年の仲間が突撃し殲滅する。コレを繰り返していつて、青年とその仲間のチームは次々と敵を蹴散らしていく。

が、それでも敵の勢いは衰える様子がない。

この戦闘は初めから青年が属する、吸血姫を守らんとする共存派が不利であった。

共存派の勢力が、青年を含めた吸血姫のために戦い、たとえ命を失つても構わないという意志と覚悟を抱く、

城下町の一部の人間と、周囲に住む亜人の戦士なのに対し、敵の勢力は、これまで吸血鬼によつて隣人が吸血種、或いはグールとされ失うことになり、

その仇を討とうとする者たちと、それに乘じてやつてきた多くの支配派の部隊だつた。

仇を討とうとする者は、支配派だけでなく、どちらにも属さない者や、

城下町で暮らしていた者もいるのだ。

だが、たとえどれだけ大勢であろうと、たとえ見知った顔が敵として前に立とうと、

青年”ソラ”は一遍の迷いも無く戦場を駆け巡り、一人でも多くの仲間を生かそうと、一人でも多くの敵を滅ぼさんと蹴りを振るい鉄拳を放つ。

城の四方を敵に囲まれ襲い来る中、ソラとその仲間達は城の正面、最も多くの敵が向かつてくる城門の前で奮闘していた。

ソラ自身とその仲間達は揃つて実力者ぞろいで、個々人の実力もさることながら、その連携力もあって、戦闘が始まつてから長くないときが過ぎた今でも、

各々多少の傷を負いつつも誰一人欠けることなく生き残つていた。

その連携は一人の敵によつて終わりを告げる。

一つの敵部隊を殲滅し次へ向かおうとした所、ソラ達の上から影が差した。

見上げてみると、一匹の飛竜が彼等の上空を通り過ぎて行つた。

空中の敵に対しては地上からの狙撃、又は飛行能力を有する亜人に
よつて守られているのだが、

その飛竜は、飛竜に騎乗した人物はそれらを一蹴して城へと向かつ
ていった。

「あいつは…まさか…？」

ソラは、あの飛竜に見覚えがあり、騎乗しているであろう人物に心
当たりがあつた。

このままでは吸血姫が危ういと思い、彼女の下へ行こうとするが、
敵が大勢迫っている現状でこの場を離れるわけには行かないと思い
止まる。

が、そんな彼の様子を察して仲間が促す。

「行け、ソラ！」

「な、何を言つてるんだ…？今この場を離れるわけには…」

「俺達だけで何とかするさ。それよりも、今城に向かつていった奴、
やばいんだろ？」

「あ、ああ…」

「だつたら尚更だ。さつさと行つて姫さんを守つて来い！」

「…スマン、ここは任せた…」

「おうー！」

仲間の了承の声を聞き、ソラは城壁へと向かう。

城門を空けるわけにはいかないので、長時間の戦闘によつてできた
くぼみや、

刺さつている矢や槍を利用して、身体能力を遺憾なく発揮して、
縄も梯子も使わずに壁を登りきる。

その勢いのまま、自分に出せる最大限の脚力と跳躍力をもつて、
速度を落とすことなく、屋根伝いに城へと、吸血姫の下へと向かう。

決して彼女を死なせない為に、守るために…

ソラ（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその3です。
次の話でキーワードにありました三角関係の片割れにして、
本作ヒロインが登場します。

ある意味もう片方も出でますが…
なぜ”ある意味”なのかは本編にて…

「たらたらプロローグ書いてないさつせと本編は入れ」と言われるかもですが、もう少しお待ちを。
後一話、ないしは二話でプロローグは終わります。

それでは、じの辺で。

意見、指摘、感想待つてます。

女戦士リスト（前書き）

プロローグの4話目。

予定通り、本作ヒロインと”ある意味”三角関係の辻割れが出でています。

苦手な戦闘描写をがんばって書きました。

読んで、楽しんでいただけたら幸いです。
では、どうぞ…

女戦士ミスト

白で一番の広さがある広間、そこに備えられた、使われる素材が違えば門ともいえる巨大な窓。

透明な壁一枚を隔てて繰り広げられる激戦を一人の女性、吸血姫が見守っている。

両腰に剣を下げいつでも戦闘に参加できる、と言つより今すぐにも戦場に立ちたいところであったが、

それは今尚自分のために戦う共存派たちに止められていた。

真祖の力を考えれば、戦場に出たら一騎当千の力を見せるだろうが、それはすなわち四方を敵に囲まれるということだ。

元城下町の者ならばともかく、支配派の者ならば亜人を、吸血姫を倒すためならばと、平気で大規模な攻撃をしてくる。そこに吸血姫がいれば部下を囲に足止めして、味方がいようと大量の矢を放ち、広域魔法を放つてくる。

巻き込まれるのが支配派だけなら良いが、共存派としては、支配派以外の者を完全に敵として割り切ることができず、極力無力化の方針で動いていた。

巻き込まれる者を減らすことと、支配派の技術力も警戒して、吸血姫には出ないでもらっていた。

多大な力を有する真祖の吸血姫であるが不死身ではないし、そもそも真祖を作り出したのは支配派だ。

何らかの対処技術を編み出している可能性もなくはない。故に吸血姫は戦場に出ずに城の防御に回つもらっていた。

城には魔法使いと吸血姫が共同で張った魔法障壁が展開しており、城と中に非難していいる民を守っていた。

障壁は吸血姫が在城する限り展開され、敵を認識して侵入を阻み、大砲の砲弾だろうと大規模魔法だろうと防ぐことができる堅いものだ。

だが、いかに強力だろうと、それ以上の強さの攻撃を受ければ弱まるし、何かしらの技術によつて侵入を許してしまうかもしれない。

その時に対処するために、いつでも戦闘ができるように準備を怠つていなかつた。

その備えは、無駄になることはなかつた…

吸血姫の視界内、戦場の遠方上空に一つの影が映る。影は一直線に吸血姫がいるところに向かつており、

その巨体を、その正体を顕にする。それは一匹の飛竜だつた。

飛竜程の巨体が全速力でぶつかつてこよつと障壁は揺るがないだろうが、

何かの予感を感じて飛竜を注視すると、何者がが騎乗しているのが見える。

一人と一匹が近づき、騎乗者が持つ物が見えてくる。

それは、その人と同じくらいの大きさの十字架。

それが確認できる距離まで近づくと、騎乗者が十字架の上部をこちらに向けて何かを放つた。

放されたのは通常の倍の太さ、長さは普通の矢。それが4連続で放たれ障壁に刺さつた。

4本の矢は隣の矢と線を繋ぎ合ひ、1つの四角形を描いて、障壁に

穴が開いた。

その穴から障壁を通過した飛竜は、勢いそのまま窓を割り破り広間へ突入してきた。

降り注ぐガラスの破片と、自分を噛み砕こうとする飛竜の顎を後ろに大きく跳躍することでかわそうとする。

そこに追撃として、刃が着けられ巨剣となつた十字架を振り下ろしてくる騎乗者。

即座に両腰の剣を抜いて交差しそれを防ぐ。

金属がぶつかり合う甲高い音を響かせながら飛ばされ、大きく距離を置いて着地する。

「派手にやつてくれたな。それに、今の一撃。

隠しようのない怒りを憎しみを感じたが…

同じ真祖であつたというだけでそこまで私が憎いか? ミスト」

自分の名前が呼ばれ、十字架を振り下ろし残身していた騎乗者、ミストという女戦士は十字架を構え直し吸血姫を睨み付ける。

「ああ、憎いぞ吸血姫」

「…もう名前で呼んでくれぬか」

この2人は知り合いであり、一時期ここにソラを加えた3人で旅もした仲でもあつた。

それが今では敵と見なされ剣を向けられる。残念に思いながら、吸血姫は問いかける。

「何故剣を向ける? 何故そこまで私を憎む?」

共存派ではないが支配派に属してもいなかつたし、

身内家族が被害に遭つたわけでもなかつただひつ

「支配派も家族も関係ない。私が憎む理由は一つ。
おまえが私から…ソラを奪つたからだ！」

叫びながら十字架を振りかぶつてくる。

それを両手の剣でいなしながら理由を考える。
いや、改めて考えるまでもなかつた。

ソラの名前が出てきた時点で大体を理解できてしまつた。

「何度も…何度も説得した！

共存派でいる限り、吸血姫のそばにいる限り、支配派が襲つてく
ると！

死ぬかもしれないと！殺されるかもしれないと！

だが…ソラは聞いてくれなかつた！

ソラは、ソラは…おまえを選んで私から離れていった…！」

止まることなく振るわれ続ける剣戟を反撃することなく、
時に防ぎ、時に受け流し、時にかわしながら、
吸血姫はミストの叫びを受けていた。

剣戟が次第に感情が乗つて苛烈に、しかし洗練されていく、
十字剣に比べると頼りないくらいに細い剣一振でいなすのが困難に
になり、魔法も混ぜてくる。

相手がミスト、かつての旅仲間であるとこつことで殺傷性のあるも
のは極力使わず、

風圧や衝撃などによつて遠くに押しやる。

疲労による無力化を狙つたが、吸血姫を討ち取ることしか考えてい
ないミストはその勢いを衰えず、
押しやられる度に感情を、怒りと憎しみを倍増させる」となつた。

それでも諦めず、吸血姫は無力化を図りながら説得を続ける。

「本当に止まるつもりはないのか、ミスト」

「あるわけがない！」

「自惚れるわけではないが、私が死ねば、ソラは悲しむ。殺した者を恨み、憎むだろう。仇討ちなどはせんだけが、それはつまり、生きて傍にいる限りそれらが向けられることが多いな。」

「それでも良いのか！？」

「それでもーソラが生きてくれるのならそれでいいーー。」

「だが、ソラは根っから共存派の人間。私や他の亜人のために戦うことはずやめないぞ」

「そんな思想…おまえを殺すことでえてみせるーー。」

叫ぶと同時に十字架を腰に抱え間髪入れず矢を連続で放つ。天井と床、それぞれ4カ所にささり、先ほどと同様に線が繋がり、更に線同士が繋がって面となり、半透明な立方体の膜が完成し、広間を囲った。

「これは…」

「封魔結界。これでこの広間にいる限り、おまえは魔法を使えなくなつた」

「こんなものの結界の起点さえ壊せばよいのだろう？」

「私達を相手にしながらそれが出来るか？」

「魔法が使えずとも、真祖の身体能力を持つてすれば…達？」

「私がどうやってここに来たのか忘れたか？やれ！ギャラドス…！」

指示を受けてミストが騎乗していた飛竜、ギャラドスが文字通り火を噴いた。

盾もなく魔法による障壁を張れない吸血姫は大きく跳ぶことで回避するが、

跳躍によって地に足がつかない状態になつた隙を逃すはずがなく、ミストもギャラドスが噴く火に乗るような動きで吸血姫に迫る。

封魔結界が張られたことで吸血姫は圧倒的不利に陥った。魔法が使えないという条件は吸血姫もミストも同じだが、魔法を交えることで無敵とも言えた吸血姫と、元から魔法が使えないために魔法に頼らずに戦っていたミスト。魔法がなかつたら武器を使った接近戦の実力は同等だった。

二人だけならば拮抗したかもしれないが、この場には飛竜がいた。

咆吼をあげれば火が噴き、翼を羽ばたかせれば旋風と鎌鼬が吹き荒れ、腕や足、尾が振るわれ打ち付けると地が揺れ岩石が盛り上がる。これら、人間が魔法を使ってやつと起こせる現象を、竜族である飛竜は自身の身一つで起こすことができるのだ。

結界を破ろうにもミストと飛竜がそれを許さず、ミストを先に無力化しようとしても飛竜が阻み、飛竜を先にどうにかしようと剣一振りでは力不足。

状況は悪化の一途をたどり、吸血姫の傷は徐々に増えていき、さらに悪いことに、十字剣と飛竜の豪腕・豪脚・豪尾を受け防いで、限界が来たのか剣の片方が折れてしまった。

もう片方も限界が近いことを感じて、剣を使うのは攻撃時のみとし、敵の攻撃は回避することに専念していたのだが、こうなっては、戦闘はもはやワンサイドゲーム。

矢と十字剣の遠近両方をこなせるミストと飛竜のコンビネーションに、

ついに吸血姫は追い詰められてしまった。

矢で服を床に縫い付けられたところを飛竜の豪腕がとらえた。咄嗟に剣を盾にするが、限界寸前だった剣は容易く折り碎かれ、それに止まらず壁に打ち付けられ、追撃の矢が身体に刺さり壁に縫い付けられた。

「ぐううつー？」

苦渋の声を漏らす吸血姫にミストが近づく。懐から一本の矢を取り出し十字架に装填する。

「”太陽の欠片”を加工して作られた鎌だ。この矢で心臓を貫かれ焼かれてしまえば、例え吸血鬼の真祖だろうと生きてはいられないだろう。これで終わりだ…死に果てる吸血姫…！」

体力も低下し、魔法も使えず、身動きもとれない吸血姫に、

無慈悲にも刺さつた対象を燃え上がらせる矢が放たれる。

「すまないソラ… ビリヤー！」声でのよいつだ

もはや避けられぬ死を覚悟して瞳を閉じよいつとする。

レティ—————！

だが、自分の名前を愛称で叫ぶ声に閉じよいつとした瞳を大きく開く。

田の前に黒い背中が現れ視界を埋めた。

女戦士//スト（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその4です。

次の話でプロローグは終わり（の予定）です。
ヒロイン吸血姫の本名も次に出てきます。

それでは、この辺で。

意見・指摘・感想まつてま～す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878x/>

吸血姫がやって来る

2011年11月29日16時48分発行